

Quellenstudien: Der Bombenangriff auf den zugewiesenen Distrikt für die staatenlosen Flüchtlinge in Shanghai

阿部, 吉雄
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/2560390>

出版情報 : 言語文化論究. 44, pp.75-84, 2020-03-13. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



資料調査：上海の無国籍避難民指定地域への爆撃

阿 部 吉 雄

始めに

第2次世界大戦期とその前後の数年間、中国の上海租界にはナチスドイツの迫害に耐えかねてドイツ（オーストリア、チェコスロバキア等を含む）を出国したか、ポーランド等でドイツ軍の侵攻に追われた中欧・東欧系ユダヤ人のコミュニティが存在した。その規模は太平洋戦争直前の1941年12月時点で約1万7000人に達した。

上海のユダヤ人難民コミュニティの歴史には、上海ユダヤ教区（die Jüdische Kultusgemeinde / Jüdische Gemeinde）の設立（1939年7月）、上海租界当局による難民の流入制限（1939年8月）、太平洋戦争開戦による日本軍の上海における権力掌握（1941年12月）、無国籍避難民¹と呼ばれたユダヤ人難民の居住と営業を制限する「指定地域」（designated area / zugewiesener Distrikt）、いわゆる上海ユダヤ人ゲットーの設置（1943年5月）などいくつかの大きな事件があったが、終戦直前の1945年7月17日のアメリカ軍による指定地域の爆撃もそのひとつであり、難民たちが残したメモワールや上海のユダヤ人難民に関する先行研究のほとんどが言及している。

本稿ではこれらのメモワールや先行研究の記述に加え、ユダヤ人難民が発行していた新聞の記事や死亡広告を通して、爆撃が上海のユダヤ人難民社会に及ぼした影響と戦災に対する難民社会の対応、特に被災者支援の方法を明らかにしたい。

爆撃の場所と時間

James R. Rossによると「1944年の夏と秋、ビルマと成都の基地のアメリカ軍爆撃機にとって上海は主要な標的ではなかった。最初の空襲は6月だった。秋から冬にかけて爆撃はより激しく、より頻繁になった。飛行機はドック、倉庫、船舶を爆撃した。1945年の初めには、空襲は大抵日中になった。」² 難民のFred Marcusがつけていた詳しい日誌によれば、上海における最初の空襲警報は1944年6月12日に発せられ、6月全体で5回、7月6回、8月10回、9月2回、10月2回、11月9回、12月7回、1945年1月10回、2月3回、3月7回、4月10回、5月1回、6月2回、7月11回、8月1回だった。³ 1945年6月下旬にはアメリカ軍が沖縄を占領し、上海への爆撃はさらに容易になった。上海のすぐ北にある江湾飛行場も重要な攻撃目標のひとつだった。

爆撃の翌日の7月18日に発行された『上海ユダヤ新聞』（Shanghai Jewish Chronicle）第184号2ページの記事「上海への空襲」（Luftangriff auf Shanghai）では「日本陸軍および海軍の新聞局は昨日午後2時30分に共同コミュニケで、B-24とB-25計約60機の敵機が午後1時頃上海地域を爆撃したと発表した。当地の防衛施設は深刻な被害を受けなかった」と言うだけで、具体的な攻撃目標は明ら

かにされなかった。これは軍部発表の通常スタイルであり、翌18日にも行われた爆撃に関する7月19日発行の『上海ユダヤ新聞』第185号1ページの記事「上海への新たな空襲」(Erneuter Luftangriff auf Shanghai)でも「B-25、B-24、P-38、P-51からなる約100機の敵機が昨日正午、東方から上海空域に侵入した。町の数カ所に爆弾が投下され、多くの住居を破壊したが、当地の防衛施設に何ら損害は与えなかった。攻撃機は午後1時頃に飛び去った」と報じている。

当時ニューヨークで発行されていた『大美晩報』(Shanghai Evening Post and Mercury)は攻撃目標や戦果を報じた。7月27日発行の第30号6ページの記事「戦争における最も激しい空襲で上海が爆撃される」(Shanghai Is Bombed In War's Heaviest Raid)は「上海は7月17日に戦争でその最も激しい空襲を経験した。その時沖縄から第7空軍の200機以上の Liberator、Mitchell、Invader、Thunderbolt⁴が飛行場や上海港を爆撃し銃撃した。約300トンの爆発物が大きな江湾飛行場に投下された。この飛行場には中国における日本の航空機が最も多く集結していた。アメリカ機の搭乗員たちは、すべての爆弾が目標エリアに着弾するのを見たと言った。日本機は迎撃を試みなかったが、対空砲火は激しかった。攻撃によりアメリカの重爆撃機2機が不明になった」と伝えたが、『上海ユダヤ新聞』とは逆に住民の被害については触れていない。⁵

『大美晩報』は「アメリカ機の搭乗員たちは、すべての爆弾が目標エリアに着弾するのを見たと言った」と報じているが、着弾した「目標エリア」が「飛行場や上海港」に止まらず、上海港と江湾飛行場の間のユダヤ人難民たちが住む虹口・揚樹浦地区も含むことは、多くの難民と中国人住民が被害を受けたことから明らかである。そもそもこの日は曇りであり、難民たちはメモワールで飛行機のエンジンの音は聞こえたが、機体自体は見えていないと証言している。例えば、Evelyn Pike Rubinは「空は曇っており、空気は静かで非常に湿っていた。私は飛行機の音が聞こえたが、見ることはできなかった。」と、Ernest G. Heppnerは「ほとんど2時だった。少し高い雲が空にあった。(中略) 私たちは最初にエンジン音を、それから近づく爆撃機の深い轟音を聞いた」と、医師のDr. Theodor Friedrichsは「7月17日は曇天の蒸し暑い日だった。(中略) 突然私たちは雲の上の飛行機のエンジンのブンブンという音を、そしてそれから耳をつんざくような爆弾の爆発音を聞いた」と述べている。⁶

Rossによると「1945年7月17日、319爆撃航空団の25機の新しい双発爆撃機A-26が、上海から500マイルちょっとの沖縄の嘉手納飛行場から上海時間午前9時49分、100ポンド爆弾を積んで飛び立った。彼らの任務は上海のすぐ北にある江湾飛行場の攻撃だった。319爆撃航空団はイタリアから移動して来たばかりで、前日太平洋での最初の任務として九州の飛行場の攻撃に飛んだばかりだった。(2機が編隊からはぐれて帰還し、)23機が12時9分、高度9600~10600フィートで上海に到達。6000フィートに厚い雲があり、江湾飛行場は視認不可能だった。編隊長機の爆撃手Robert C. Robertsは沖縄からの飛行時間を基に標的の位置を判断するしかなかった。彼に従って、他の機も爆弾を投下した。全部で263発。数発の爆弾の投下が早すぎ、虹口に落下した。数十の建物が崩壊し、爆風だけで壊れたものもいくつかあった。」⁷

爆撃が行われた時刻についても多少の不一致がある。上海のユダヤ人難民研究の始祖David Kranzlerは虹口・揚樹浦地区への爆弾投下を12時13分としており⁸、Rossが言う上海到達12時9分に近い。Dr. Friedrichsも「正午頃、私はBroadwayに近いWayside Roadで往診していた」と証言している。⁹ 他方、Marcusの日記によれば、予備警報が12時50分、本警報が午後1時であり¹⁰、『上海ユダヤ新聞』が伝えた日本陸軍および海軍の新聞局発表の「午後1時頃」に一致する。(Marcusが翌日『上海ユダヤ新聞』の記事を読んで時刻を確認したということはある。)また、上掲のHeppnerの

「ほとんど2時」や Horst Wartenberger の「午後2時直前」¹¹ という難民の証言も、爆撃の混乱が収まってから時刻を確認したか、後から推測したものと考えれば、『上海ユダヤ新聞』の言う約60機または『大美晩報』の言う200機以上が攻撃を終えるのに要する時間と矛盾しない。

上海ユダヤ教区が発行していた新聞『ユダヤ会報』（Jüdisches Nachrichtenblatt）の7月20日に発行された第28号1～2ページの記事「主は与え、主は奪った」（Der Herr hat gegeben, der Herr hat genommen ...）では「昼どきに予期せず突然空襲警報が鳴り響いた。この時間大抵の人間は昼食を取っていた」とある。難民の Hans Cohn は「悲劇が起こった時、私は Rosenberg のレストランで働いており、私たちはちょうど昼食を出していた」と、難民の Judy Urman は通りすがりに見かけた10歳くらいの少年が彼に、「学校から昼食に家へ帰って来た時、自分の家が被爆したと語った」と証言している。他方、やはり学校の生徒だった13歳の Lily (Liselotte) Isaack によると、爆撃が始まった時彼女と14歳の姉はまだ学校にいて、爆撃が収まってから学校を離れることを許されたと証言している。¹² 貧しい人々のための塘山路、現在の唐山路のスープ・キッチンも爆撃の被害を受け、食事をもらいに来た人々が犠牲になった。¹³

爆撃の被害

上海では地下水面が高いため防空壕を掘っても人間1人分の保護も与えられず、7月17日の空襲の際難民たちは安全な場所として大きなテーブルや頑丈なベッドの下、1階のドア枠の中に逃げ込んだ。¹⁴ しかし貧民向けの住居の集合である里弄の家屋は爆弾の直撃は無論のこと、爆風の圧力だけでも簡単に崩壊した。セメント張りの床や天井も助けにならなかった。死者や負傷者の多くは瓦礫の下敷きになっていた。火災も発生し、爆弾や対空砲火の榴散弾の破片による負傷も起こった。難民の Hannelore Heinemann Headley の女友だちの兄は榴散弾の破片で受けた膝の傷の結果、脚を切断された。¹⁵ Kranzler によるとユダヤ人難民の死者31人、負傷者約250人（多くが重傷者）、住居を失った者約700人だった。空襲の3日後の7月20日に発行された『上海ユダヤ新聞』第186号1ページの記事「死者への祈り」（Jiskor）には24人の死者の名前が紹介された。翌7月21日の『上海ユダヤ新聞』第187号2ページの記事「7月17日の犠牲者たち」（Die Opfer vom 17. Juli）では6人の死者の名前を追加するとともに、上海難民病院（Shanghai Refugee Hospital）に運ばれた27人の負傷者の名前を紹介し、さらに外来診療所（Ambulanz）で239人の負傷者が治療されたことを伝えた。上海難民病院に運ばれた負傷者27人の中には Headley の女友だちの兄の名前がある。

『上海ユダヤ新聞』第186号および第187号で報じられた計30人の死者のうち、7月27日に発行された『上海ユダヤ新聞』第193号2ページの「(1945年7月12日～7月25日の)ユダヤ教区の家族の知らせ」（Familien-Nachrichten der Juedischen Gemeinde (in der Zeit vom 12. 7. - 25. 7. 1945)）で死亡を伝えられたのは24人であり、『上海ユダヤ新聞』第186号で報じられた24人の犠牲者と同一である。その内訳は男性17人、女性7人で、指定地域を管轄する提籃橋分局特高股が1944年8月に作成した『外人名簿』によると、ドイツ難民（German Refugee）19人、オーストリア難民（Austrian Refugee）4人、無国籍難民（Stateless Refugee）1人だった。¹⁶ 「ユダヤ教区の家族の知らせ」では死亡者の住所等も紹介され、その中の7人の住所は指定地域の西端で江湾飛行場に近い826 East Yuhang Road（東余杭路、現在の東有恒路）であり、ここには3階建ての SACRA ビルディングがあり、爆弾の直撃を受けていた。¹⁷ 『外人名簿』によると、この住所で登録された難民は365人に上り、「ユダヤ教区の家族の知らせ」には記載されなかったポーランド国籍のユダヤ人犠牲者のうち父と息子の計2人

がこの住所である。そこには35人の幼児を預かる幼稚園もあったが、教師たちはこの子どもたちを早めに帰宅させていた。¹⁸ さらに、近くの943 East Yuhang Road で3人、932 East Yuhang Road で1人が死亡した。

『上海ユダヤ新聞』第187号で報じられた6人の犠牲者は男性5人、女性1人で、ポーランド難民5人、国籍不明1人である。この6人は『上海ユダヤ新聞』第193号の「(1945年7月12日～7月25日の)ユダヤ教区の家族の知らせ」には記載されていない。「ユダヤ教区の家族の知らせ」はユダヤ教区の新聞『ユダヤ会報』からの転載であり、この6人は教区の会員になっていなかったと考えられる。5人はポーランド出身であるため、また他の1人は氏名からドイツやオーストリア出身と考えられるが、自身の意志で教区に加入していなかったためではないか。『ユダヤ会報』の正式名は『中欧ユダヤ人(ユダヤ教徒)のためのユダヤ会報』(Juedisches Nachrichtenblatt for Central European Jews (Mitteleurop. Juden))であり、上海ユダヤ教区は本来ポーランド出身ユダヤ人難民やユダヤ人難民の中に一定数いたキリスト教徒を対象とする組織ではなかった。またユダヤ教徒であってもユダヤ教区に加入しない人々もいた。

さらに難民の Hugo Burkhard によると、上述の7月20日発行の『上海ユダヤ新聞』第186号の記事「死者への祈り」および7月27日発行の『上海ユダヤ新聞』第193号の「(1945年7月12日～7月25日の)ユダヤ教区の家族の知らせ」で死亡を伝えられた24人のうちの1人の男性は SACRA ビルディングで落ちてきた梁により即死したが、その妻は片足を引きちぎられた。彼女の名前は7月21日の『上海ユダヤ新聞』第187号の記事「7月17日の犠牲者たち」で上海難民病院に運ばれた負傷者27人の中にある。そして彼女は8月5日に上海難民病院で亡くなる。¹⁹ 彼女の死亡は8月10日発行の『上海ユダヤ新聞』第197号2ページの「(1945年8月2日～8月8日の)ユダヤ教区の家族の知らせ」(Familien-Nachrichten der Juedischen Gemeinde (in der Zeit vom 2. 8.-8. 8. 1945)) および同日発行の『ユダヤ会報』第31号4ページの「(1945年7月26日～8月8日の)ユダヤ教区の家族の知らせ」(Familien-Nachrichten der Juedischen Gemeinde (in der Zeit vom 26. 7.-8. 8. 1945)) で紹介される。Kranzler を始めとする上海のユダヤ人難民研究における爆撃による死者が31人だったという通説は、最初に発表された24人+6人=30人にこの女性を加えたものであろう。

死亡した難民の中にはユダヤ教区の以前の会長 Dr. Felix Kardegg やユダヤ教の先唱者 Jacob Aschendorff が含まれ、多くの難民に衝撃を与えたが、犠牲者の大部分は無名の人々だった。しかし空襲の翌日の7月18日に発行された『上海ユダヤ新聞』第184号以降、犠牲者を悼む家族、親戚による死亡広告が多数掲載される。知人、同僚、隣人による弔意広告では遺族への連帯の表明が行われることもあった。その中で7月21日に発行された第187号の2ページに掲載された死亡広告には、第186号および第187号で報じられた30人の死者に含まれない夫婦の名前がある。他の死亡広告と同様、2人の死亡の原因は述べられていないが、病気で夫婦が同時に亡くなることは通常ありえない上に、『外人名簿』での住所は SACRA ビルディングがあった826 Tung Yuhang Lu (826 East Yuhang Road) である。SACRA ビルディングでの犠牲者は『上海ユダヤ新聞』第186号で発表された7人に、『上海ユダヤ新聞』第187号で発表されたポーランド難民の父子と8月5日に上海難民病院で亡くなった女性、そして7月21日の死亡広告で挙げられた夫婦を加えると12人になる。死亡者の総計は、最初に発表された24人+6人=30人と8月5日に亡くなった女性と死亡広告の夫婦の33人である。本当の人数はおそらくさらに大きいであろう。ユダヤ人難民の関連では34の家屋が破壊され、180の家屋が損害を受け、700人が住居を失った。

中国人の被害については正確な統計がないが、死亡者200²⁰～4000人²¹、負傷者250²²～1000人²³、

住居を失った者数千人²⁴という数字が挙げられている。

負傷者への救命活動

死亡者や負傷者の多くは崩壊した建物の下敷きになっており、瓦礫の中から救い出されねばならなかった。7月19日に発行された『上海ユダヤ新聞』第185号1ページの記事「冷静さと思慮深さ」(Ruhe und Besonnenheit) および7月27日に発行された『ユダヤ会報』第29号3～4ページの記事「救助活動」(Das Rettungswerk)によれば、その作業や消火活動には家族だけでなく、隣人や爆撃の被害を受けなかった地域の数千人の難民も参加したが、特に保甲という中国伝統の自警組織を外国人(ユダヤ人)にも採用した外人保甲自警団(Foreign Pao Chia)の100人以上の治安奉仕班は鉄かぶと、つるはし、シャベルという装備で成果を上げた。救出作業は7月17日の昼から21日の晩まで連続して行われた。

頭上に降り注ぐ榴散弾の破片の危険を顧みず²⁵、難民たちによりユダヤ人と中国人の区別なく瓦礫の下から救い出された負傷者のうち、重傷者は138 Ward Road(華徳路、現在の長陽路)のWard Roadハイムに置かれた3人の外科医がいる上海難民病院²⁶へ、軽傷者は各ハイムに設置された外来診療所へ運ばれた。2人の医師がいるChaoufoong Road(兆豊路、現在の高陽路)外来診療所は爆撃現場に近く、最も困難な仕事を果たした。²⁷ 上海難民病院の薬局とラボは通常の業務を中止し、注射や包帯の準備、使用された器具の消毒を行った。病院に所属しない個人の医師や薬局はいたる所で自発的に救命活動に参加した。Ward Roadの監獄内の病院に運ばれた数百人の中国人負傷者たちは、駆けつけた8人の難民医師によって治療された。²⁸ 麻酔や包帯、ガーゼはすぐに尽きてしまい、ハイムの住民たちは自らの唯一の肌着やベッドシーツを提供し、包帯のために引き裂いた。女性の難民たちは負傷者のために茶を入れ、包帯を巻くのを手伝い、横になれるように自分の枕や毛布を提供した。²⁹ 大惨事に直面して難民たちがとった自発的行動に対して、中国人住民は翌日ハイムに多くの菓子運び、感謝の気持ちを表した。各ハイムの外来診療所で難民および中国人の負傷者を600人近く、上海難民病院で200～300人を治療した。³⁰ 上述の7月21日発行の『上海ユダヤ新聞』第187号の記事「7月17日の犠牲者たち」の数字(外来診療所で239人、上海難民病院で27人のユダヤ人難民負傷者を治療)から逆算すると、治療対象者の半数以上が中国人だったことになる。³¹

亡くなったユダヤ人難民たちは爆撃の翌日の7月18日Chaoufoong Roadハイムの礼式ホールに運ばれ、Chewra Kadischa(ユダヤ人埋葬協会)の執行部全員が、棺の祭儀的な台への安置と埋葬の世話をし、絶望した親族を最初に慰めた。午後6時には死亡者のうち17人が、5人はBaikal Road(倍開爾路、現在の惠民路)墓地に、12人はPoint Road(周家嘴路)墓地に埋葬され、その中にはDr. Felix Kardeggも含まれていた。各ユダヤ人難民組織の代表者たちが犠牲となった故人たちを悼む挨拶を行い、遺族たちにあらん限りの支援を約束した。ポーランド出身の難民の葬儀はWard Roadシナゴークで行われた。³² その翌日も埋葬が行われた。

被災者への救援活動

焼け出された難民の財産が火事場泥棒に盗まれないようにキッチン・ファンド(Kitchen Fund)³³の治安奉仕班が外人保甲自警団と共同で現場を封鎖し、昼夜を問わず警備を行った。難民たちは価値のある所有物を住居から里弄の一角の空き地に運んだ。火災が消されるまであらゆる種類の品物

がそこに午後中置かれていたが、無傷のままだった。³⁴ 住居が被災し食事を作ることができない700人の難民のために、キッチン・ファンドと上海ジョイント (Shanghai Jewish Joint Distribution Committee)³⁵ が共同で Seward Road (東熙華路、現在の東長治路) ハイムで1日1回昼の給食を行った。彼らにとってもう一つの問題は、屋根や壁が壊れ、空襲の翌々日以降土砂降りの雨が数日間続いたため、雨水が流れ込み、室内や難民たちの家具や寝具に被害を与えたことだった。彼らのためにキッチン・ファンドは、爆撃の被害を受けず生徒の犠牲もなかった SJYA 学校 (上海ユダヤ人青少年協会学校 / Shanghai Jewish Youth Association School) に450人分の宿泊場所を設置し、キッチン・ファンドの洗濯奉仕班とユダヤ教区の福祉局はマットレスや毛布を準備した。ひとつの部屋に男性、女性、子どもが20~30人收容され、床にはマットレスが敷き詰められ、被災者たちは毛布の下で服の着替えを行った。ハイムでは男女別々の部屋になっており、また2段ベッドを並べて、その間には通路があり、ベッドシーツをカーテン代わりにして最低限のプライバシーが存在したことを考えると、SJYA 学校での宿泊が全くの応急処置だったことが伺える。³⁶ Seward Road ハイムからの給食は SJYA 学校にも運ばれた。また最初救護所として用いられた Alcock Road (愛而考克路、現在の安国路) ハイム³⁷を始め、いくつかのハイムの休憩室もその後被災者の宿泊に提供された。SJYA 学校は指定地域の外側に位置していた。ユダヤ人難民が指定地域から出るには許可証が必要だったが、住居を失った被災者たちは許可証なしで SJYA 学校と指定地域の間を往来を許された。³⁸ しかし一般のユダヤ人難民は指定地域を出ることが許されず、爆撃により供給が減少した食料と清潔な水を手に入れるために一日の大半の時間を費やした。³⁹

1945年7月22日に発行された『上海ユダヤ新聞』第188号1ページの「声明」(Aufruf)ではシオニズム青少年同盟 (Der zionistische Jugendbund des Brith Noar Zioni) が爆撃の被害者のために路上募金と戸別募金を行うと発表した。また1945年8月10日に発行された『上海ユダヤ新聞』第197号2ページには上海ジョイントとキッチン・ファンドの連名の「告示」(Bekanntmachung)として、爆撃で被害を受けた人々の損害補償の申請を受け付ける事務所が8月8日に SJYA 学校に置かれたことを伝えている。アメリカのジョイントは3万5000アメリカドルを特別に分配して送金した。⁴⁰ 家屋、特に屋根の修繕が優先的に行われた。⁴¹

終わりに

7月17日以前、上海のユダヤ人難民は自分たちが指定地域にいることをアメリカ軍は知っているため、そこを爆撃することはないと確信していた。むしろ彼らを迫害したドイツの同盟国の日本が敗れ、戦争が終わることを期待し、アメリカ軍機が上海上空に現れると屋根に上がったたり窓から身を乗り出したりして、手を振りながら見ていた。⁴² ところが指定地域に何発もの爆弾が落下し、多くのユダヤ人難民(と中国人住民)が犠牲になったため、難民たちの間では狙われたのは日本軍が指定地域内に設置した洋上の船舶へ指示を送る無線局や弾薬庫であり、自分たちではないというのが定説になった。爆撃機は速度が秒速約100メートルに達することを考えれば、この解釈は説得力がない。編隊での爆撃では機体ごとに爆弾を投下するタイミングが数秒ずれる上に、編隊内での各機体の位置関係もあり、ピンポイントで攻撃目標を破壊するのは不可能で、その周辺にも被害が及ぶのは当然のことである。当日は雲のせいで視界が悪かった。指定地域内に位置する無線局を狙ったのであれば、実際よりはるかに大きな被害が生じたであろう。やはり、指定地域の数百メートル南側の黄浦江沿いの港湾施設や倉庫または数キロメートル北側の江湾飛行場が攻撃目標だったと考

えるのが妥当であろう。

その一方で、爆撃時とその後の難民たちの対応は理性的なものだった。爆弾の爆発時に口を開けて耳の鼓膜が破れるのを防ぐという元兵士としての経験は必ずしもすべての人々に共有されていたわけではないが⁴³、家の中で最も安全な場所である大きなテーブルや頑丈なベッドの下、1階のドア枠の中に逃げ込み、路上では衣服が汚れるのを厭わず地面に身を投げ出した。また、消防隊より早く現場に駆けつけた外人保甲自警団が消火作業や火事場泥棒を防ぐための現場の警備を行ったが、それは1944年3月14日に指定地域で発生した火災への対応ですでに経験済みであり、相互扶助が最高度に強化されたコミュニティだった。⁴⁴ さらに、ユダヤ人医師たちが難民だけでなく中国人住民をも分け隔てなく治療したことは、本来災害時に最も脆弱であるはずの難民集団が同胞だけでなく、地元の住民まで支援する能力があることを示した。その結果、たとえ戦争災害という特殊状況ゆえとはいえ、終戦までの短い期間、ユダヤ人難民と中国人住民の間に連帯感が生まれた。

指定地域が再び攻撃されることはなかったが、上海への爆撃は翌日以降も続いた。アメリカ軍は自分たちを攻撃しないという確信が崩れたショックは大きく、難民たちは空襲警報のサイレンや飛行機のエンジン音に神経質になり、雷鳴が聞こえただけでベッドの下に潜り込むほど恐怖を抱いた。⁴⁵ また、爆撃の際に多くの死体やその破片、血、内臓などを目撃した体験は、戦後何年間も夢に見るほど恐ろしいものだった。⁴⁶ 終戦の知らせがなくこの状況がさらに数週間続けば、難民たちの生活も心理も回復不可能な状態に陥ったであろう。

注

- 1 無国籍避難民というのは、1941年11月ドイツ政府が外国に滞在するユダヤ人のドイツ国籍を剥奪する法律を作り、翌1942年1月から施行したためである。ポーランドはロンドンの亡命政府を除けば、既に消滅している。また、1943年2月18日にラジオおよび新聞を通して発表された上海方面大日本陸軍最高指揮官および同海軍最高指揮官連名の「指定地域」設置の布告に続く説明部分では「ドイツ（旧オーストリア、チェコスロバキアを含む）、ハンガリー、旧ポーランド、ラトビア、リトアニア、エストニア等から1937年以降に上海に到着した者」という条件が付けられており、ロシア出身のユダヤ人は該当しない。イギリスまたはイラク国籍を持ち、19世紀から上海に在住しているセファルディ系ユダヤ人も同様である。すなわち中欧・東欧出身ユダヤ人難民のほとんどが無国籍避難民に該当し、また無国籍避難民の大部分を中欧・東欧出身ユダヤ人難民が占めていた。なお、当時の日本（日本語）では「Refugee / Fluechtling」を難民でなく避難民と呼んだ。
- 2 James R. Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. The Free Press. New York. 1994. S. 218.
- 3 Audrey Friedman Marcus, Rena Krasno: „Survival in Shanghai. The Journals of Fred Marcus 1939-49“. With a Foreword by Deborah E. Lipstadt. Diary Translation from German by Rena Krasno. Pacific View Press. Berkeley, California. 2008. S. 44-117.
- 4 それぞれ爆撃機 B-24、B-25、A-26、戦闘機 P-47の愛称。
- 5 1945年7月20日に発行された『上海ユダヤ新聞』第186号1ページの記事「上海への空襲」(Die Luftangriffe auf Shanghai) は7月17日の空襲で16地点に30～150kgの小型爆弾が投下されたと伝えた。

- 6 Evelyn Pike Rubin: „Ghetto Shanghai“. Shengold Publishers. New York. 1993. S. 142; Ernest G. Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. University of Nebraska Press. Lincoln & London. 1995. S. 124 f.; Dr. Theodor Friedrichs: „Berlin, Shanghai, New York: My Family’s Flight from Hitler“. Translated and edited by Frederick Rolf. Cold Tree Press. Nashville, Tennessee. 2007. S. 191.
- 7 Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 218.
- 8 David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. KTAV Publishing House. Hoboken, New Jersey. 1988 (1976). S. 553.
- 9 「Wayside Road」は指定地域の南端の匯山路、現在の霍山路。「Broadway」はWayside Roadの西端にあったBroadway Theater（百老匯大戲院）。Dr. Friedrichs: „Berlin, Shanghai, New York: My Family’s Flight from Hitler“. S. 191.
- 10 Marcus, Krasno: „Survival in Shanghai. The Journals of Fred Marcus 1939-49“. S. 105. Rena Krasnoによれば、予備警報は2分間のサイレン1回、本警報は5秒間のサイレン7回、警報解除は15秒間のサイレン2回だった。Rena Kraso: „Once upon a Time in Shanghai. A Jewish Woman’s Journey Through the 20th Century China“. China Intercontinental Press. Beijing China. 2008. S. 117.
- 11 Marcia Reynders Ristaino: „Port of Last Resort: The Diaspora Communities of Shanghai“. Stanford University Press. Stanford, California. 2001. S. 212.
- 12 Hans Cohn: „Risen from the Ashes: Tales of a Musical Messenger“. Hamilton Books. Lanham, Maryland. 2006. S. 47; Judy Urman: „Schönebeck – Shanghai – Denver. Erinnerungen einer Deutschen jüdischen Glaubens“. Hrsg. v. der Stiftung Gedenkstätten Sachsen-Anhalt. Mitteldeutscher Verlag. Halle (Saale). S. 69; Lisa Mac Vittie with Donald W Mac Vittie: „Persecuted, Stateless, Free. One Girl’s Flight from the Nazis“. CreateSpace Independent Publishing Plattform. North Charleston, South Carolina. 2017. S. 51. Lily (Liselotte) Isaackは後にアメリカへ移住し、Lisaに改名。結婚により姓がMac Vittieになった。
- 13 Hannelore Heinemann Headley: „Blond China Doll. A Shanghai Interlude 1939-1953“. Blond China Doll Enterprises, Triple H. Publishing. St. Catharines, Ontario. 2004. S. 111; Shoshana Kahan: „In Fire and Flames: Diary of a Jewish Actress“. In „Voices from Shanghai. Jewish Exiles in Wartime China“. Edited, Translated, & with an Introduction by Irene Eber. The University of Chicago Press. Chicago & London. 2008. S. 114 f.
- 14 Dr. Friedrichs: „Berlin, Shanghai, New York: My Family’s Flight from Hitler“. S. 194; Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 130.
- 15 Headley: „Blond China Doll. A Shanghai Interlude 1939-1953“. S. 113.
- 16 注1のように、1937年以降にドイツ、オーストリア、ポーランド等から上海に到着したユダヤ人難民は1942年以降無国籍（避）難民になっていたが、『外人名簿』などの書類上では上海到着時の国籍のままになっていることが多かった。
- 17 日本は1943年2月の指定地域設置の布告に際し、地域外に居住するユダヤ人難民の地域内への移住を推進するため、上海在住ロシア系ユダヤ人に上海アシュケナージ救援共同協会（Shanghai Ashkenazi Collaborating Relief Association / SACRA）を設立させた。
- 18 Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 220.
- 19 Hugo Burkhard: „Tanz mal Jude! Von Dachau bis Shanghai. Meine Erlebnisse in den

- Konzentrationslagern Dachau – Buchenwald – Getto Shanghai 1933-1948“. Reichenbach Verlag. Nürnberg. S. 171.
- 20 Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 220.
- 21 Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 124.
- 22 Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 220.
- 23 Liliane Willens: „Stateless in Shanghai“. Earnshaw Books, Hong Kong. 2010. S. 174.
- 24 Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 124.
- 25 Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 126
- 26 1943年8月29日に発行された『上海ユダヤ新聞』第232号7ページの記事「指定地域に新しい移住者病院」(Das neue Emigranten-Hospital im Distrikt)によると、1943年9月5日に公式開所した移住者病院(上海難民病院)は90床を備えた。1944年6月までには125床に拡張された。Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 475.
- 27 680 Chaoufoong Road の Chaoufoong Road ハイムは住民2人が爆撃で死亡し、多くの犠牲者が出た826 East Yuhang Road の SACRA ビルディングや4人が死亡した Point Road にも近かった。『外人名簿』では Chaoufoong Road ハイムの住所に743人の難民が登録されている。
- 28 Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 126.
- 29 Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 126; Ross: „Escape to Shanghai. A Jewish Community in China“. S. 219; Felix Gruenberger: ‚The Jewish Refugees in Shanghai‘. In „Jewish Social Studies“. vol. 12, no. 4, October 1950. S. 345; Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 554.
- 30 Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 570.
- 31 難民の Hugo Burkhard によれば、外来診療所で治療された負傷者は約300人、そのうち60～80人が中国人だった。Burkhard: „Tanz mal Jude! Von Dachau bis Shanghai. Meine Erlebnisse in den Konzentrationslagern Dachau – Buchenwald – Getto Shanghai 1933-1948“. S. 171.
- 32 Kahan: ‚In Fire and Flames: Diary of a Jewish Actress‘. In „Voices from Shanghai. Jewish Exiles in Wartime China“. S. 114.
- 33 キッチン・ファンドは1942年8月に難民支援のために設立された。Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 466.
- 34 Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 127.
- 35 アメリカのユダヤ人団体「アメリカ・ユダヤ人合同配分委員会」(American Jewish Joint Distribution Committee / Joint / JDC) から上海へ派遣された委員会。
- 36 Steve Hochstadt: „Exodus to Shanghai. Stories of Escape from the Third Reich“. Palgrave Macmillan. New York. 2012. S. 168. SJYA 学校はユダヤ人難民の子弟のために1942年1月に627 East Yuhang Road に開校し、9学年で600～700人の生徒を擁した。上述のように爆撃の際、生徒たちはちょうど昼食を取りに帰宅したところだったが、幸い彼らの中に犠牲者はいなかった。1945年7月21日発行の『上海ユダヤ新聞』第187号2ページおよび7月22日発行の第188号4ページの広告は、7月23日から学校の授業を再開すると伝えている。しかし難民たちは8月15日の終戦まで学校にいた。

- 37 Alcock Road ハイムは66 Alcock Road にあり、『外人名簿』では434人の難民がこの住所を登録している。ハイムとは自力で部屋を借りることができない約2500人の最も貧しい難民たちが無料で住んでいた収容所で、上述の SACRA ビルディングもそのひとつである。
- 38 指定地域内に仕事があった他に、SJYA 学校ではシャワーが使えなかったため、被災した難民たちは指定地域内のハイムへ行く必要があった。Hochstadt: „Exodus to Shanghai. Stories of Escape from the Third Reich“. S. 168.
- 39 Vivian Jeanette Kaplan: „Ten Green Bottles. The True Story of one Family’s Journey. From War-torn Austria to the Ghettos of Shanghai“. St. Martin’s Press. New York. 2002. S. 241.
- 40 Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews – The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. S. 570.
- 41 Dr. Friedrichs: „Berlin, Shanghai, New York: My Family’s Flight from Hitler“. S. 197.
- 42 Heppner: „Shanghai Refuge: A Memoir of the World War II Jewish Ghetto“. S. 125.
- 43 Dr. Friedrichs: „Berlin, Shanghai, New York: My Family’s Flight from Hitler“. S. 191.
- 44 阿部吉雄、「資料調査：上海ユダヤ人ゲットーでの1944年3月14日の火災」、九州大学大学院言語文化研究院、『言語文化論究』第42号、2019年、49～58ページ。
- 45 Hochstadt: „Exodus to Shanghai. Stories of Escape from the Third Reich“. S. 168.
- 46 Headley: „Blond China Doll. A Shanghai Interlude 1939-1953“. S. 112.

本稿は JSPS 科研費 JP17K03135 の助成を受けたものです。